採用年度	令和 2 年度
お名前	澁谷 聡一
派遣期間	令和 2 年 4 月 1 日 ～ 令和 4 年 3 月 31 日
書面合議・面接審査区分/小区分	医歯薬学/外科学一般および小児外科学関連
派遣国	英国
受入機関名	University College London
受入機関部局名	Great Ormond Street Institute of Child Health
研究概要	小児外科医としての背景を生かして、小児へ移植可能な臓器グラフトの作成を目指しています。その一つとして、先天性食道閉鎖症の治療へ応用可能な食道グラフトを作成するため、脱細胞化されたブタ食道にヒト由来の前駆細胞を移植する方法を研究しています。この方法により、脱細胞化された足場組織を生かして、自家細胞由来の臓器グラフトを作成することができます。
派遣前の準備についてのアドバイス	私は渡英後に海外特別研究員として採用されたため、受け入れ機関との調整などは特別必要ありませんでした。当初、1年間有効なAcademic Visitor Visaで渡英し、海外特別研究員としての研究期間に入った後に、Tier 5 (Government Authorised Exchange) Visaに切り替えました。ビザの申請には受け入れ機関からCertificate of Sponsorship (CoS)を発行してもらう必要がありますが、その手続きには予想外に時間がかかることが多いので、なるべく早く大学のHRと連絡をとって申請をすることをお勧めします。自分から繰り返し確認をしないと手続きが止まっている、ということはビザの申請に限らず日常茶飯事なので、嫌がられることは気にせず積極的に連絡をとったほうが良いです。(“You have to keep annoying them.”とイギリス人は言います。)
派遣中に問題になりうることについてのアドバイス	過去に海外生活の経験がなかった私にとってコミュニケーションの壁はやはり大きかったです。ヨーロッパ圏の人たち同士は文化が近いので、英語が抜群でなくてもコミュニケーションがとりやすいですが、文化も違う、英語がしゃべれない日本人は意識的に挑戦していかないと取り残されていきます。なので、言語としての英語だけでなく、イギリス、ヨーロッパの歴史や文化についても勉強し、自分を溶け込ませることが大事だと思っています。(日本での常識がこちらの非常識であることは多いです。逆も然り。)とは言ってもロンドンはとにかく多様性に溢れた街なので、日常生活でアジア人として差別や不利益を感じることはまずありません。日本人の知り合いも沢山できました。
派遣先での生活の様子	家賃が高いロンドンでは一つのアパートを 3-4 人でシェアすることが多いです(£500-800)。一人で暮らす場合は Studio Flat と呼ばれる部屋を借ります(£1000-1500)。私は自宅でも論文執筆や勉強に集中したかったので後者を選びました。街の中心部から外れると家賃が安くなりますが、治安も交通の便も悪くなるのでお勧めしません。家族連れの方は日系企業の駐在員の方が色々と詳しいので、知り合いを見つけて情報をもらえると良いと思います。食事は世界中の料理が食べられるので個人的には満足しています。外食は日本の感覚からするとかなり高いですが、食材はスーパーで安く手に入るので自炊をするとかなり節約できます。冬の天気は評判通り陰鬱としていますが、春から夏にかけての気候の良さと日の長さは本当に素晴らしいです。
海外特別研究員に採用されて良かったこと	皆様がおっしゃる通りですが、お金の心配をする必要がなく、研究に集中できるというのは非常に貴重です。それに加えて自分自身で給料を賄うことができる、というのは研究室内でも一目を置かれる要素になります。過去に海外特別研究員に採用されていた日本人の方との出会いもありました。そして何よりも、採用されるのが困難な海外特別研究員に選ばれたということは研究者としての大きな自信となっています。